

平成25年度学校自己評価(記述)

<p>教育目標</p> <ol style="list-style-type: none"> 設置趣旨及び県が目指すべき4つの人間像を踏まえた、生徒一人一人の「生きる力」の育成 併設の阪神昆陽特別支援学校との交流及び共同学習の推進 高校生地域貢献事業等を活用した地域に愛される学校づくり 教職員の豊かな人間性や専門性、実践的指導力の向上
--

<p>学校経営方針</p> <ol style="list-style-type: none"> 生徒の興味・関心や、多様な学習ニーズに応じて、主体的に学ぶことができる多部制単位制高等学校として、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」を育む。 阪神昆陽特別支援学校が同一敷地に設置されたメリットを最大限に生かして交流及び共同学習を推進し、ふれあいを通じた豊かな人間性を育むとともに、社会におけるノーマライゼーションの理念を進展する礎となる学校をめざす。また、両校の実践を県内のみならず全国へ発信する。 学校評議員制度や高校生地域貢献事業、YU・らいふ・サポート事業などを活用して、伊丹市池尻地区や尼崎市西昆陽地区など、学校周辺の地域と連携した教育活動を推進し、地域に開かれた、地域に愛される学校をめざす。 「教育は人なり」という言葉がある。両校の教職員は、教育の専門家としての使命感と高い倫理性を保持し、豊かな人間性の涵養に努める。また、専門性と実践的指導力の向上や、社会の変化に対応した教育観を培うことをめざして、研修と修養に努める。

評価点：十分に達成できた=4、概ね達成できた=3、あまり達成できなかった=2、達成できなかった=1

平成26年1月

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	評価点	成果	課題	改善策						
学校運営	開かれた学校づくり	保護者・地域等への情報発信等	1	3.3	1 ①部活動紹介、部通信、月間予定や各種配布物が定期的にアップされており、充実している。 ②ホームページや各種通信によって情報発信を行い、中高連絡会、オープンハイスクール等によって学校の詳細な情報提供を行うことができる。 ③ホームページに部活動紹介、各種通信の更新が定期的に行われている。 ④部通信の発行回数、HPの更新回数は昨年度よりも増え、昨年度と比較しても積極的に情報発信を行うことができた。	1 ①部通信は1部のみが発行している。 ②ホームページの内容は充実しつつあるが、生徒の活用は今一つの感がある。 ③更新の頻度を上げたい ④インターネット等利用されていない方々への対応。 ⑤本校のミッションやめざそうとするところを、さらにどのように発信していくか。 ⑥保護者や生徒等への情報発信は進んでいるが、地域住民に対する情報発信が不足している。 ⑦ホームページは阪神昆陽両校共通のページの更新が滞っている。	1 ①各部からの部通信が発行されればなおよい。 ②HPにて生徒の活躍(近畿大会入賞など)をアピールする。 ③地域住民に向けた様々な情報の提供方法を検討 ④職員室前ホワイトボードやホームページ、掲示板等も利用しながら適宜、情報提供を行うようにしていくと、さらに開かれた学校づくりにつながると思う。 ⑤特別支援学校のホームページ担当者として協力しながら、充実していく必要がある。 ⑥ホームページ等の有効活用をお知らせしていく。 ⑦成長していく生徒たちを見ていただける機会を増やす。一人一人が迷惑をかけているという意識を持つことが必要であり、生徒に合った指導を行う。ブログ等を使う。 ⑧学校新聞等の作成・配布や地域の行事等への参加。 ⑨更新作業の運用規定をさだめて効率化を図る						
			2	3.3	⑤ホームページは、文化祭や部活動のページの更新、「保健だより」の掲載など、内容の充実が図られている。 ⑥『学校案内』の今年度版が作成できた。 ⑦体育大会や生活体験発表会で保護者・地域への情報発信を行った。 ⑧ノーマライゼーション通信や部活動など、ホームページの充実が図られている。			2 ①曜日や時間帯によっては参加できない事。 ②中高連絡会で情報提供したもののその情報がどう役立ったのか知る由もなかった。	2 ①土曜日にオープンハイスクールを行う。(例えば月曜の授業を行い、月曜日は代休にする) ②中高連絡会を複数回実施して報告を得るしかないが現実には難しいかも				
			3	3.5	2 ①中高連絡会や学校説明会を通じて阪神昆陽高校の情報提供をすることができた。 ②募集要項説明会の土曜日実施や中高連絡会、オープンハイスクールの実施で学校の情報提供を行った。 ③中高連絡会では、中学校の先生から直接クラス生徒の話聞くことができ役だった。 ④中学校との生徒情報交換等が実施されている。そことにより、生徒の中学時代の様子などがわかり、指導にも役立っている。 ⑤各市教委、各中学校との生徒情報交換等が実施されており、生徒指導等の対応において有効である。					3 ①校長を通じて本校の取り組みが県内のみならず他府県にも情報発信されていると思うが、具体的に、いつ、どこで、どのような情報発信がなされたのか、職員に知らせてもらいたい。(今でも職員会議等、機会あるごとに学校長から知らされているが、もう少し詳しく知りたいと思う。)	2 ①LHRの時間を活用し地域清掃を実施する。 ②日常的に美化の意識を持てるようにしていく。 ③清掃を行う前に、わかりやすい清掃方法をまとめたプリントを見せて視覚的に伝える。 ④清掃活動だけでなく、地域の各種催し等にさらに積極的に参加する。 ⑤現在も行われているが、職員がポイ捨てされたゴミを拾う姿を生徒に見せるようにする。 ⑥本校の売りであるノーマライゼーションとリンクした貢献内容を考える		
			4	3.1	3 ①他府県からの注目の高さや、本校入学に関する問い合わせの多さを感じる。 ②学校長の大方での発表やパンフレットの作成、他府県からの視察受け入れなど広く情報提供を行った。							4 ①教材研究や日々の校務によりなかなか校外巡視の時間が確保できない。 ②地域清掃の回数が限られている。 ③校外(内)清掃がどのような目的で行われているのか、再度生徒へ周知させる必要がある。 ④年2回の全校清掃活動を恒例行事にする。 ⑤近隣地域への美化活動も行っているが、ポイ捨てやたむろ等、まだまだ生徒の迷惑をかけているという意識が低い。情報発信を増やせるのでは。	5 ①学校開放事業を学校全体の取り組みとして、委員会組織とし窓口や役割分担、担当者を明確にする。学校行事などにおいて、地域に情報提供し呼びかけるだけでなく、コンテンツの充実を図っていかねばならないと思う。
			5	3.7	4 ①教員の校外巡視と清掃が行え、徐々にであるが地域住民に対する活動状況が浸透してきた。 ②全校一斉清掃での校内だけでなく学校周辺の清掃活動に加え、高校生地域貢献活動では、花のプランター制作を行い、地域に設置した。 ③全校生による地域清掃を実施した。生徒の活動状況も昨年度以上によいものであった。 ④7月と12月、学校近隣地域清掃活動に取り組んだ。全校生徒による清掃は多部制・単位制学校では画期的。地域貢献に大きくアピールすることになった。また地元住民と生徒が楽しそうに会話する場面もあり、地域との交流も深まった。								
		6	3.1	5 ①グラウンド開放等を積極的に行い、地域の活動に貢献している。 ②運動部との調整で、学校体育施設開放が可能となり、開かれた学校づくりにつながっている。 ③地域の活動に対して、学校施設の開放が行われた。グラウンド開放などで多くの方にグラウンドを活用していただいている。	7 ①休日の学校体育施設解放が特定の教員の負担になっている。 ②学校体育施設開放の「利用予定表」のような情報提供があれば、職員にも地域の方々にも、さらにわかりやすく伝わると思う。								
7	2.8	6 ①学校評議員に意見聴取を実施し、学校運営の改善に役立っている。 ②学校評議員会は例年通りおこなわれた。	8 ①時間割の関係上各種会議に出席できない職員がいるが、全員参加の有効策がなかなかない。 ②年次会を行うことができていない。 ③職員会議や各種委員会、教科会等、授業との兼ね合いで出席できない職員が多く、時間設定の難しさを感じる。 ④意志の疎通がうまくいかない時がある。 ⑤担当者によっては1日に3回以上の会議が生まれ、校務に支障をきたすことがある。 ⑥生徒数が増加することにより、情報共有数も増えて時間が足りなくなるのではないか。 ⑦職員の増加とともに、会議時間の確保がますます難しくなった。 ⑧委員会に参加できる工夫が必要である。 ⑨会議が物理的に飽和状態である。	8 ①各年次の情報交換等のため、月1回程度年次会を行う。 ②各委員会に参加できなかった職員への情報共有の方法を考える。 ③定期会議の重複を避ける工夫をする。									
各種会議等の実施及び連携	8	3.5				8 ①会議が適切に行われ、職員の共通理解を図ることができている。 ②部会や交流及び共同学習委員会、心のサポート委員会等を定期的に行い、要配慮生徒等の情報交換や学習環境の改善を図った。 ③授業のない時間をうまく調整し校務運営委員会、職員会議を行った。 ④心のサポート委員会、教育課程委員会、部主任会など定期的に開催することができた。 ⑤定期的に各会議、委員会が開かれ、情報の共有ができた。 ⑥教育課程委員会、心のサポート委員会、1部会、2部会、3部会等の実施や情報伝達で、職員の共通理解を図った。 ⑦毎週1回、定期的な部会議を実施することにより情報を共有することができた。	9 ①職員会議の決定事項の共有。 ②新転任者が急増するこの数年間、創立時の意欲や共通理解を継承していく難しさ。全員が出席できればいいが、難しい。 ③職員会議の活性化。多くの職員が主体的な参加意識を感じ取れるような職員会議になれば、学校運営がより活性化すると思う。 ④多部制の時間割上、職員の全員参加が難しい。 ⑤職員会議に全員が出席できない状況がさらに悪化しつつある。	9 ①職員会議の実施時間帯等を隔週で変えるなど、何度かに一度は会議に参加できるように調整できないか。 ②勤務時間の都合上、全職員が職員会議に参加するのは難しいと思うが、参加できない教員には職員会議の議題配布だけでなく、決定事項の報告資料があれば良いと思う。 ③短時間でも全員が出席できる職員会議の設定を工夫する。					
	9	3.4				9 ①部会や各委員会等を適切に実施し、職員の共通理解を図ることにより、円滑な校務運営を推進できた。 ②諸会議・諸委員会ですべての意見が調整できた。 ③校務運営委員会と職員会議を月2回定例として、弾力的な運営に努めている。会議が確実にあった。 ④各部、委員会の意見調整を行い、校務運営を推進した。			他 ①個人情報に関する書類取り扱い。 ②掲示板等の利用による効率的な情報伝達の推進。 ③会議資料のデジタル化 ④キャリア教育実施計画のさらなる具現化を図る。	他 ①職員掲示板を利用して連絡事項を伝える。 ②議事録での確認だけでなく、関係部署へ直接確認することに努める。 ③会議書類の事前回覧等を徹底し、会議に費やす時間を短縮する。 ④必ず保管が必要なのは、鍵のかかるところへ保管し、必要のないものはシュレッダーで必ず処分。 ⑤委員の兼務の上限を定めることができればよいが、難しいのかもしれない。 ⑥職員掲示板の活用や日常会話等での情報交換を密にする。			
円滑な学校運営	各種会議等の実施及び連携	8				3.5	8 ①会議が適切に行われ、職員の共通理解を図ることができている。 ②部会や交流及び共同学習委員会、心のサポート委員会等を定期的に行い、要配慮生徒等の情報交換や学習環境の改善を図った。 ③授業のない時間をうまく調整し校務運営委員会、職員会議を行った。 ④心のサポート委員会、教育課程委員会、部主任会など定期的に開催することができた。 ⑤定期的に各会議、委員会が開かれ、情報の共有ができた。 ⑥教育課程委員会、心のサポート委員会、1部会、2部会、3部会等の実施や情報伝達で、職員の共通理解を図った。 ⑦毎週1回、定期的な部会議を実施することにより情報を共有することができた。	9 ①職員会議の決定事項の共有。 ②新転任者が急増するこの数年間、創立時の意欲や共通理解を継承していく難しさ。全員が出席できればいいが、難しい。 ③職員会議の活性化。多くの職員が主体的な参加意識を感じ取れるような職員会議になれば、学校運営がより活性化すると思う。 ④多部制の時間割上、職員の全員参加が難しい。 ⑤職員会議に全員が出席できない状況がさらに悪化しつつある。			9 ①職員会議の実施時間帯等を隔週で変えるなど、何度かに一度は会議に参加できるように調整できないか。 ②勤務時間の都合上、全職員が職員会議に参加するのは難しいと思うが、参加できない教員には職員会議の議題配布だけでなく、決定事項の報告資料があれば良いと思う。 ③短時間でも全員が出席できる職員会議の設定を工夫する。		
		9			3.4	9 ①部会や各委員会等を適切に実施し、職員の共通理解を図ることにより、円滑な校務運営を推進できた。 ②諸会議・諸委員会ですべての意見が調整できた。 ③校務運営委員会と職員会議を月2回定例として、弾力的な運営に努めている。会議が確実にあった。 ④各部、委員会の意見調整を行い、校務運営を推進した。	他 ①個人情報に関する書類取り扱い。 ②掲示板等の利用による効率的な情報伝達の推進。 ③会議資料のデジタル化 ④キャリア教育実施計画のさらなる具現化を図る。		他 ①職員掲示板を利用して連絡事項を伝える。 ②議事録での確認だけでなく、関係部署へ直接確認することに努める。 ③会議書類の事前回覧等を徹底し、会議に費やす時間を短縮する。 ④必ず保管が必要なのは、鍵のかかるところへ保管し、必要のないものはシュレッダーで必ず処分。 ⑤委員の兼務の上限を定めることができればよいが、難しいのかもしれない。 ⑥職員掲示板の活用や日常会話等での情報交換を密にする。				

評価点:十分に達成できた=4、概ね達成できた=3、あまり達成できなかった=2、達成できなかった=1

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	評価点	成果	課題	改善策
勤務時間の適正化		業務のIT化・効率化	教務支援システムを導入し、生徒の出欠管理や成績処理、諸帳票の作成等に係る業務の効率化を図る。	10	①業務系PCIによる出欠管理、成績処理で効率的に生徒の情報を管理できている。 ②教務支援システムにより帳票の管理を容易に行うことができている。 ③業務のIT化により、業務の効率化につながっている。 ④特に担任の事務的負担が大いに軽減されている。 ⑤教務支援システムを導入し、生徒の出欠管理や成績処理、諸帳票の作成、受講登録等に係る業務の効率化を図っている。 ⑥教務支援システムにより効率的な各種処理ができている。 ⑦新しい共有ホルダーが開設され有効に使用できている。	10	①来年度教職員の数が増え、業務系パソコンのスペース確保など、来年度にむけての体勢づくり。 ②教務支援システムのさらなる改善を業者と連携して実施している。 ③その日のうちに入力することを改めて徹底していく。 ④システム管理委員会を機能させ、複数で運用できるようにする。
				11	①定時退勤日の設定等により、リフレッシュに努めることができた。 ②定時退勤日を週2日に増やし、教職員の超過勤務削減に努めている。 ③残業時間が短く、勤務時間は適正化されている。ノー残業デーの徹底により体調管理をよりやすくなった。 ④ノー残業デーでは、定時退勤しやすくなり職員員の健康保持につながっている。 ⑤先生方の声掛けにより、超過勤務することなく帰宅できている。 ⑥勤務時間を遵守する意識が高まってきた。 ⑦ノー部活デーの実施で、教職員の勤務時間の削減を図っている。 ⑧管理職、部主任の声かけ並びに、職務の円滑な分担により定時退勤が定着した。 ⑨ノー残業デーという形で制度的に保障されているのは実現を伴わなくてもよいことである ⑩定時退勤日が効果的に実施されている。 ⑪週2日のノー残業デーについて、超過勤務の削減に努めた。 ⑫ノー残業デーの設定により、仕事の効率をより良くしていく工夫が出来るようになった。 ⑬「ノー残業デー」の声かけによって、定時退勤せざるをえず、仕事の効率化や私的な時間の有効利用を図るようになった。	11	①12限後の部活指導により勤務時間をすぎることがあるようである。 ②ノー残業デーの設定で効率化を考えると出来た一方で、なかなか、うまく進める事の出来ない場合などもある。 ③教職員によっては定時退勤できていない場合がある。 ④ノー残業デーに関わらず仕方ない業務以外で残業している教員を見かける。全員で仕事を分担すべきである。
勤務時間の適正化		超過勤務の縮減	ノー残業デーの設定等により、教職員の超過勤務の縮減を図る。	3.5	①管理職、部主任の声かけ並びに、職務の円滑な分担により定時退勤が定着した。 ②ノー残業デーという形で制度的に保障されているのは実現を伴わなくてもよいことである ③定時退勤日が効果的に実施されている。 ④週2日のノー残業デーについて、超過勤務の削減に努めた。 ⑤ノー残業デーの設定により、仕事の効率をより良くしていく工夫が出来るようになった。 ⑥「ノー残業デー」の声かけによって、定時退勤せざるをえず、仕事の効率化や私的な時間の有効利用を図るようになった。	他	①B、C勤の場合、定時よりだいぶ早く学校に来て、仕事をしている場合がある。 ②本校の特徴である勤務時間の変動についての健康保持。 ③保護者にも仕事があり難しいかもしれないが、保護者にも教員の勤務時間を理解してもらう必要がある。 ④特に3部の部活動の時間確保が難しい。
				12	①生徒指導の研修会を実施し、共通理解を図っている。 ②生徒指導部を中心に、指導方針が示され、丁寧な言葉遣いでの指導を全職員が心がけている。 ③概ね全職員がカウンセリングマインドの視点で生徒対応できている。 ④生徒の実態に応じて、特別支援教育コーディネーターや児童相談所、警察等と連絡を取り、より有効な生徒指導に努めた。 ⑤生徒の行動を注意深く観察し、気づいたことがあれば面談等を行い、生徒理解を深めている。 ⑥各委員会や職員会議等において、生徒指導方針の共通理解を図っている。 ⑦個々に応じた生徒指導ができ、生徒達もかなり落ち着いてきたと思われる。 ⑧多くの職員が生徒指導に協力して下さっている。 ⑨学校生活全体を通して生徒指導ができている。 ⑩生徒指導全般について、統一性のある指導体制となっている。	12	①生徒会活動、部活動においては、教員の指示なしには行動できない生徒が多く、生徒の自主性が発揮できていないと言われている。 ②時間を守ることができない生徒や、正しい言葉使いができない生徒が多い。 ③未然防止に努めてきたものの、いじめや問題行動の芽が生じた際の初期対応は学級担任や部主任が可能な範囲で対応し、心のサポート委員会は後日、その報告・検証及び検討を行うことになり、各事案への組織的な対応・支援に時間がかかる場合があった。 ④開校時と現在で対応の基準が変化してきた。 ⑤不登校傾向の生徒への対応が不十分である。今後、新しい職員がますます増えていき、考え方も多様化していくことが考えられるため、いかに共通認識を保っていくかが課題となる。 ⑥全日制の学校以上に多様な出来事が起こるので、若手やベテランなど職員ごとに対応能力に差ある場合が多い。小さな案件でもさらにチームを組んで対応する努力をする必要がある。
生徒指導		生徒指導体制の充実	生徒指導方針について、全職員の共通理解を図り、一体となった指導体制を整備する。	3.2	①中学校や関係機関との情報交換が綿密に行われた。生徒・家庭・生徒間の連携がよくとれている。 ②カウンセラー、警察、中学校等と情報交換をしながら生徒指導等に努めている。 ③育ちの相談室の先生やキャンパスカウンセラー等と必要に応じて連携をとることができた。 ④中学校の教員が生徒指導に協力してくれた。	13	①各市、学校において中高連絡会の実施等、情報の共有に温度差がある。
				13	①関係機関等との連携を密にし、より実効性のある生徒指導に努める。	14	①夏休みの三者面談が家庭事情により実施できない生徒が多い。
				14	①必要に応じて、個人面談や家庭訪問等を実施し、生徒への理解を深める。	15	①他部生徒の情報交換が心のサポートの報告だけになっている。 ②生徒数が増加する中、より多くの希望生徒のサポート。 ③心のサポート委員会などに挙がっていない生徒も配慮の必要性がある生徒がいる可能性があったり、日に日に変わる生徒の心情を理解しようとする必要がある。生徒会が活性化できれば。
生徒指導		生徒の内面理解を図る指導の推進	高校生心のサポートシステムを活用し、キャンパスカウンセラー等による研修会の実施等を通じて指導法等の共通理解を図る。	3.5	①毎週1回心のサポート委員会(いじめ対応チーム)を行い、課題のある生徒、支援を要する生徒の情報を共有し、特別支援教育コーディネーター、学校医、キャンパスカウンセラー等との連携を密にして対応することにより、多様な課題や悩みを抱える生徒の内面理解及び対応・支援を迅速に行えるよう図り、いじめや問題行動に発展しないよう、未然防止に努めることができた。 ②キャンパスカウンセラーの活用については、カウンセリング実施日に教職員が生徒の指導について相談でき、その後の対応に役だっている。 ③生徒指導や心のサポートシステム等により、教員の生徒への理解を深めることができ、配慮の必要性や指導の方法をより行いやすくなった。粘り強く指導する体制ができている。 ④心のサポート委員会をはじめ定期・臨時合わせ迅速な生徒情報交換と共有により、重大事を防止する生徒指導がなされた。 ⑤心のサポート委員会、キャンパスカウンセラー、特別指導委員会等が効果的に機能している。	16	①生徒会が自主的に活動する場面が少ないように感じる。ただ、行事に参加する場面は増えた。 ②生徒会の行事への取り組みは余地がある。 ③生徒会ボランティア隊を活用して、「日本トイレのきれいな学校」キャンペーンを張り、トイレピカピカ大作戦を展開する。 ④生徒会活動がもっと活性化すれば、学校の雰囲気の良い方向に変わっていくと思う。生徒会執行部の活動が、他の生徒に見えるようになれば良いと思う。
				15	①個人面談や家庭訪問を適宜行い、生徒理解を深めることができている。 ②面談日を2回行うことで、きめ細やかな指導ができ、保護者との信頼関係が増した。 ③面談日での個人懇談(年2回)、夏休み前の3者懇談、家庭訪問等の実施で、生徒への理解を深めた。	17	①生徒会が自主的に活動する場面が増やしていく。 ②ボランティア隊を活用するなど、生徒会以外の生徒も行事の運営に携わっている意識をもたせる。 ③体育祭や文化祭等で生徒会主導の企画を立ち上げる。 ④生徒による行事の企画運営ができるためのノウハウや道筋の段階的・計画的な指導を行う。 ⑤生徒会選挙前に、ポスターを廊下にたくさん張り付けるなどする。
				16	①生徒会を中心に、行事や部活動の運営に取り組み、生徒の自主的な活動の機会を設定する。	18	①さまざまな問題行動が日々起こるため、そちらに手を取られすぎている。授業等においても、まじめに取り組んでいる生徒に申し訳ないと感じる。 ②対象とすることが心の問題であるために、たくさん資料を作成する割には、うまく解決にいたったという実感が得られない。 ③校内巡回体制を勤務や時間割を配慮しながら、学校全体で構築してみたい。
生徒指導		生徒の自主性を育成指導の推進	生徒会を中心に、行事や部活動の運営に取り組み、生徒の自主的な活動の機会を設定する。	2.8	①毎週1回心のサポート委員会(いじめ対応チーム)を行い、課題のある生徒、支援を要する生徒の情報を共有し、特別支援教育コーディネーター、学校医、キャンパスカウンセラー等との連携を密にして対応することにより、多様な課題や悩みを抱える生徒の内面理解及び対応・支援を迅速に行えるよう図り、いじめや問題行動に発展しないよう、未然防止に努めることができた。 ②キャンパスカウンセラーの活用については、カウンセリング実施日に教職員が生徒の指導について相談でき、その後の対応に役だっている。 ③生徒指導や心のサポートシステム等により、教員の生徒への理解を深めることができ、配慮の必要性や指導の方法をより行いやすくなった。粘り強く指導する体制ができている。 ④心のサポート委員会をはじめ定期・臨時合わせ迅速な生徒情報交換と共有により、重大事を防止する生徒指導がなされた。 ⑤心のサポート委員会、キャンパスカウンセラー、特別指導委員会等が効果的に機能している。	17	①卒業後の進路については、実績がないので不透明な部分が多い。 ②生徒が卒業後の進路を見据えて学校生活を送ることができていない。進路に関する情報がまだ少ないことが一因かもしれない。 ③将来のことを安易に考えている生徒が多い。また、実際に兄弟姉妹がそれ(フリーターなど)で生活しているの何とかならないかと思っている。 ④進路指導を面談時等に行っているが、具体的な進路計画を作成できていない。 ⑤英語検定や漢字検定のほかに、簿記検定やパソコン検定、珠算検定など、就職活動にも有利となるような資格取得検定試験の案内が少ないように感じる。 ⑥計画を実践するうえでの生徒の姿勢、学力が不十分である。全日制とは違う阪神昆陽にあった進路指導の在り方や、どのように生徒に進路を考えさせるのか教職員の間でより話し合って共通理解を図ることが必要である。 ⑦生徒の多様な進路選択に応じることのできる相談体制づくり。 ⑧生徒自身が将来設計が出来ておらず、進路についての関心があまりない。模擬面接指導も必要。
				3.1	①キャリア教育推進委員会が設置され、生徒の卒業後を見据えた進路指導計画を作成する段階になった。 ②個人面談を充分行うことができている。 ③キャリア教育の本格化等次第に形が整いつつある。 ④オープンキャンパスや模擬試験、検定試験等の案内が増えたことにより、進路実現に向けて、目的意識の高い生徒からの問い合わせが増えてきている。 ⑤2年次生の就職希望者を対象にインターンシップを行ったり、多様な講師による職業講話や職業分野別・進路希望別ガイダンスを行うことにより、生徒の職業観の醸成及び進路意識の向上を図ることができた。 ⑥進路希望別ガイダンスや卒業生の話、職業講話などが実施され、進路に対する意識づくりができてきている。 ⑦総合的な学習の時間等で生徒の進路指導や職業観の醸成が図られている。 ⑧本校におけるキャリア教育計画が作成された。 ⑨インターンシップが実施された。年ごとに進路計画は充実してきており、来年度はさらに卒業に向けて中身が具体化されていくと思われる。 ⑩インターンシップや求人開拓のため、地域回り等に積極的に取り組んでいる。 ⑪進路アンケートの実施や職員の進路研修会の実施で、生徒の卒業を見据えた進路指導に取り組んでいる。 ⑫キャリア教育推進委員会を立ち上げ、全教職員連携による組織的な進路指導体制を構築している。 ⑬キャリア教育推進委員会にて今後の展開や進路実現に向けた対策などを話し合うことができた。 ⑭職員研修などからも、生徒の卒業を見据えた指導が出来るよう考える事が出来た。 ⑮総合的な学習の時間において、キャリア教育の内容に沿った進路指導が行われるようになってきた。 ⑯キャリア教育研修会や進路講演会が実施され、充実した進路指導体制が確立されたことである。	18	①インターンシップ受入事業所を拡充し、参加希望生徒を増やす。 ②希望の進路が実現するための支援。オープンキャンパスや企業説明会などにも積極的に参加できるよう指導していきたい。 ③生徒の関心のありかに関心する講話のできる外部講師の講演会を実施したい。 ④キャリア教育推進にかかわる内容を職員全体で、具体的に実行していく必要がある。 ⑤具体的な就職先・進学先の開拓 ⑥キャリア教育推進計画に基づいて、長期計画(キャリア教育)と短期計画(出口指導)の両立を図る指導計画を工夫する。
進路指導		進路指導体制の充実	外部講師等による進路講演会等を実施し、生徒の職業観の醸成を図る。	3.4	①外部講師による進路講演会が多く実施され、生徒の職業観が養われた。 ②総合的な学習の時間において、進路講演会等を行い、生徒の将来に向けての意識向上を図っている。 ③様々な職種的外部講師から講演をしてもらい、生徒にとっては進路決定に大きく役立つイメージを持てる機会となった。 ④総合的な学習の時間等の利用で、外部講師等を活用しながら、生徒の職業観の醸成を図っている。	18	①1年次から卒業まで1冊のノートに将来についての考えを適宜まとめさせる。 ②1年次のうちから卒業後の進路に関する情報を与え、どのような学校生活を送るべきか考えさせるような取り組みが必要。 ③地道な言葉がけを行う。 ④進路指導部やキャリア教育推進委員会等が中心となり、個別の進路計画の作成を進める。 ⑤進路先にとどのような選択肢があるのか、教職員の研修等で共通理解を図る。 ⑥より希望進路が明確となるような資料提供、個別相談の充実。 ⑦卒業後に何をやるのか、何をしたいのかを明確にさせ、そのためには何が必要か、どんな授業を受講した方が良いのか等を指導する。進路以前の、基本的なところ(筆記具、教科書を持ってきて授業を受ける)からで、話を聞く気が無い者が多々いるので、厳しい。 ⑧次年度の具体的な進路計画の提示
				18	①外部講師等による進路講演会等を実施し、生徒の職業観の醸成を図る。	19	①進路開拓を含めて、インターンシップ受入先を組織的かつ早期に開拓する。 ②インターンシップ報告会を行い、その意義を全校生徒に啓蒙する。 ③長期休業を利用して、集中講座を開く。 ④平常の授業で、生徒に「いつまでも高校生ではいけない」ことを繰り返し伝え、進路実現への意識付けを徹底する。 ⑤先輩からのアドバイスや方法を直接受けられる時間を設けてみる。 ⑥キャリア教育推進委員会の効率的な運営。 ⑦可能な限り、多くの職員での会社訪問・開拓。 ⑧教員による企業開拓も必要と考える。

評価点:十分に達成できた=4、概ね達成できた=3、あまり達成できなかった=2、達成できなかった=1

平成26年1月

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	評価点	成果	課題	改善策
学校運営(続き)	教職員の資質向上	教科指導力の向上	19 公開授業週間の設定等により、教職員相互の教科指導力の向上を図る。	3.2	19 ①研究授業を前期、後期に1回ずつ実施し、研修会も適宜行われ、教職員の資質向上に努めることができた。 ②多くの教員が研究授業を行えた。 ③教科の枠をこえた助言等があり、教科指導力の向上だけでなく、日頃の生徒指導に役立つ。 ④公開授業や、研究授業を行うことで新たな授業内容を構築することができた。 ⑤研究授業を行うことにより、生徒の日頃の様子や授業理解度を知ることができた。 ⑥公開授業週間の実施により、自分の教科だけでなく、他教科の教員の授業を見学するなど、教職員相互の指導力向上を図っている。 ⑦生徒による授業アンケートの実施及びそれに対する改善策を各教科で検討することによって、授業改善を図っている。 ⑧特別支援学校と高校相互の研究授業等の見学により、教科はもちろん生徒指導他、専門性を超えて教員の資質向上につながった。 ⑨公開授業は円滑に行われている ⑩公開授業、授業アンケート、各種職員研修等、様々な取組が実施されている。 ⑪公開授業週間において他教科の指導を見たことで、生徒の実態把握が深まった。	19 ①朝や夜の時間帯の研究授業が参加しにくい。 ②公開授業週間では、各教員の勤務時間が異なるため、積極的な授業参観ができなかった。 ③公開授業に参加する教職員が必ずしも多くない ④公開授業の実施後の意見交換や情報提供が時間の制約も有り、不十分である。 ⑤多部署であるため、全体の研修会を持てる時間が限られる。 ⑥研究授業とその他の行事が重なり、授業を見学できる職員数のバラつきが大きかった。 ⑦公開授業等を生かし切れていない。 ⑧研究授業後の十分に研究協議時間が確保できていない。 ⑨授業アンケート結果のより有効な各教科の活用。	19 ①授業の空きコマには積極的に授業参観に行くとともに、感想用紙を提出するよう努める。 ②教職員相互で生徒情報の交換を行い、教科指導力の向上に努める。 ③公開授業の様子や参観記録を授業担当だけでなく、できる限り共有し参考にするとも考えてはどうか。 ④授業アンケート結果のさらなる活用。 ⑤ITの機会等を増やし、具体的な場面で互いの指導力向上を図る。教師が他の教師の授業を見るように努める。 ⑥研究協議時間の確保。
		校内研修の実施	20 学校等の諸課題について、適宜、研修会を実施し、教職員全体の資質向上を図る。	3.4	20 ①年2回、対話型の進路研修会とキャリア教育研修会を行った結果、進路指導における教職員の指導力や資質向上に役立った。 ②1月には生徒指導研修会や発達障害研修会、進路研修会を行い、教職員の資質向上を図っている。 ③校内研修の機会が設けられ、教職員の資質向上が図られている。 ④研修会の内容より、指導の仕方など資質向上をはかることが出来た。 ⑤校内進路研修会及びカウンセリングマインド研修会をそれぞれ前・後期に分けて年2回、また、発達障害のある生徒理解のための研修会を年1回実施することにより、教職員全体の資質向上を図ることができた。 ⑥学校の諸課題に関する研修会が適切に実施されている。 ⑦教職員のキャリア教育への意識が向上した。 ⑧「生徒指導」「発達障害」等をテーマとした職員研修を実施した。 ⑨各種研修会で、資質向上が図られている。 ⑩時期ごとに適切な職員研修会が行えているを思う。	20 ①キャリア教育に関する指導が遅れており生徒の意識が低い。 ②教員採用試験の研修会も有り難いが休暇制度などの色々な制度等についての研修会などの実施をして頂けると有り難いです。学力差が大きいので難しい。 ③職員会議は最も効果的な職員研修の機会になりえる。この機会をどう生かしていくかが課題と思われる。 ④具体的な方法等が未だ不十分な点がある。 ⑤テレビカピカ大作戦と共同作戦を展開し、清掃活動によって教員の心を磨く。	20 ①要配慮生徒に対する具体的な対応に関する研修会の実施。 ②どの研修会も年度当初の年間計画に位置づけることにより、教職員全員が参加できるようにする。 ③希望者の勤務時間を変更する。 ④限られた時間の中での研修の充実。 ⑤資質向上等の校内研修会の実施。 ⑥公開授業に参加するゆとりがないのが原因の一つではないか。 ⑦様々な授業においてキャリア教育を取り込み、実践する。 ⑧定期的な進捗状況の報告を実施する。
		校外研修の活用	21 年次研修等を活用し、教職員のライフステージや社会の変化等に対応した資質の向上に努める。	2.9	21 ①若手教員研修会の実施。 ②若手教員を対象とした研修会を行い、教職員の資質向上を図った。 ③年代別やテーマ別の研修会を実施できた。 他 ①12月末、教職員による年末大掃除を行った。その結果、学校をよりきれいにしようという学校への愛着心が芽生えてきた。	21 ①特別支援学校との「共同の学び」において、授業展開の難しさを感じる。	
危機管理体制の整備	危機管理マニュアルの策定	22 学校の実情に応じた危機管理マニュアルを策定し、適宜、実際の対応への訓練等を行う。	3.2	22 ①避難経路や救急体制など職員に周知されるなど危機管理体制が構築されている。 ②防災、避難訓練、AEDの講習会などが計画、実施されている。 ③1月に地震時の避難訓練を行い、生徒の危機管理意識を向上させた。 ④年度当初「校内救急対応マニュアル」を再改訂・配布し、救急体制の組織化を図ることができた。 ⑤多部署であり、また特別支援、伊丹市立と協力しての訓練の実施ができていた。 ⑥避難訓練などを実施・危機管理マニュアル等が策定され、学校安全に関する教職員の危機管理意識が向上した。 ⑦震災避難訓練を行えた。よくできている。 ⑧ネットワークを成績等の業務系とインターネット接続の教育系に分け、情報セキュリティー等の危機管理を実施している。	22 ①日頃の授業はHR単位で行わないので、緊急時の生徒の安全確認が難しい。 ②避難訓練等における事前指導及び生徒の危機管理意識が不十分である。 ③避難訓練がHR時間帯に設定しているため、普通授業中を想定した訓練が実施できていない。 ④避難訓練の前後にもっと効果的な防災HRができれば、もっと生徒の危機管理意識の向上が図れると思う。 ⑤マル秘プリント等の机上での保管や教務手帳のパソコン前での置き忘れ等。 ⑥教職員全体の危機管理に対する意識の向上。 ⑦さらに真剣味を伴ったものにしたい	22 ①避難訓練前にLHR等で危機管理に関するHR活動を実施する。 ②生徒の実態把握の難しい多部署単位制高校ならではの危機管理体制を研究していく。 ③職員研修会や新聞等の事件を例に挙げた日頃の注意喚起の実施。 ④職員危機管理研修会の実施。 ⑤日頃から教職員間で互いに机上等チェックできる体制の構築。	
	家庭等と連携した危機管理体制の充実	23 家庭・地域・関係機関等との連携を密にし、実情に応じた危機管理体制を構築する。	2.8	23 ①年度当初「保健調査票」及び中高連絡会で得た情報をもとに「要配慮生徒一覧」を作成・配布し、情報の共有を図ることができた。 ②薬物乱用防止教室、サイバー犯罪防犯教室を行うことができた。 ③担任・部と専門部が一体となって、家庭・地域・関係機関等との連携を密にして生徒指導に取り組んでいる。	23 ①保護者・家庭への連絡がつきにくい生徒への対応。	23 ①緊急連絡がつきにくい生徒には必要に応じて個々の対応をマニュアル化しておく。 ②担任・保護者との緊密な連携協力を図り、まずは学校での実施日に必ず検診を受けるよう体制を整え、未受診者や要再受診者には各自受診を粘り強く勧告する。それでも受診しない場合は、学校医と相談のうえ、次年度当初の学校での実施日に必ず検診を受けさせるよう努める。	
	生徒の危機管理意識の醸成	24 危機管理について、適宜、生徒への情報提供を行い、生徒の危機管理意識の向上を図る。	3.0	24 ①生徒へ情報提供をすることにより、生徒の危機管理意識の向上につながった。 ②不審者情報などを生徒へ提供することができた。	24 ①生徒証等、貴重品の紛失が多かった。 ②各種検診及び再検診を何度督促しても受診しない生徒への対応。 ③生徒の安全意識。生徒の状況把握。	24 ①生徒の危機管理意識をもっと高める必要がある。 ②欠席者に対しても、どのような内容の講演だったか、分かりやすくプリントにまとめて手渡す。	
教育課程	基礎・基本の徹底	25 生徒の学力把握と評価基準の設定	3.1	25 ①数学などでは小テストを行い、生徒の学習状況の把握に努めている。 ②評価については、各教科で生徒の実態に応じて適切に実施している。 ③基礎力テストを行うことができた。 ④小テストを実施したり、場合によっては小中の内容を学び直したりして学力向上に努め、適切な評価基準に基づいた評価を実施している。 ⑤定期考査の結果だけに偏らない評価を行っている ⑥考査の点数だけでなく、生徒の意欲や取り組みを成績に反映することができた。 ⑦毎回プリント提出を課し、生徒の学習状況を確認している。	25 ①生徒の自尊感情を大切にしたい綿密な基礎学力の把握。欠席者が多く、知識が系統的にならない。学力が高い者が退屈しないようにしなければならぬ。 ②小中学校時代に勉強に拒絶反応を示すようになった生徒に、単純なテストの押しつけは逆効果になることもある。このような生徒をいかに学習に引き込むのが課題。・教科会議を実施して学習指導の充実や情報交換を実施する。 ③平常点と考査点は相関関係にあり、平常点を加味した評価を行っても結果的に変わりはない場合もある	25 ①生徒個人の能力に応じた評価を取り入れたいが、今の本校の人数ではかなり難しいと思う 26 ①大学受験、就職試験等必要に応じた補習を行っていく必要がある。 ②中学分野、高校初期の学習事項の学び直しの講座の設置。 ③学習状況、進路目標に応じた授業を編成する。また、場合によって長期休業を利用し、補習等を実施する。 ④少人数授業を展開するためには教員の絶対数を増やすしかないと思う。 ⑤長期休業を利用して補習を行う。 ⑥定期的なりサーチを実施し、必要に応じて補習授業を実施 ⑦英数国などに、個別学習を含み込んだ習熟度別少人数講座の開設を検討する。習熟度別授業ができればいいが、難しい。 ⑧視覚教材を使用する。	
	個に応じた学習指導の充実	26 少人数授業を実施し、生徒一人ひとりの学習状況に応じた指導を行うとともに、必要に応じて、補習等を実施する。	3.0	26 ①少人数授業により、生徒の学習状況に応じた指導を行うことができていた。 ②少人数の講座では比較的落ち着いた雰囲気での授業ができていた。 ③個々に応じた指導により、生徒の学習意欲向上につながっている。 ④特別支援との連携や多部署の特性を職員全体が共有することで、教科性を越えた評価の視点が養われた。 ⑤人数の少ない授業では予習や復習をさらに多く取り入れることができた。少人数制で行うことにより、ある程度個々の生徒の特性に合わせて授業を進行することができた。 ⑥個別に習熟度にあった指導がされている。 ⑦国語や数学で夏季補習を実施して状況に応じた学習指導を行った。 ⑧パソコンやモニターテレビを活用して、生徒の実情にあったわかりやすい授業を行っている。 ⑨子ども多文化共生サポーターとも連携し、個別支援を行った。	26 ①補習は一部の教科のみ実施しているため、必要に応じてさらに多くの教科で行う必要がある。 ②生徒の学力差が激しく、一人ひとりの学習状況に応じた指導が困難である。 ③生徒一人ひとりの学習状況の差が大きく、進路目標にも違いがあるため、それらに対応できる授業を展開しなければならない。 ④勉強する習慣が定着しない。 ⑤欠席しがちな生徒への授業支援。 ⑥生徒数が30人を超える授業も多く、少人数授業が徹底されているとはいえない。授業によっては、生徒に落ち着きがなく、集中できない場面が多い。比較的少ない人数であっても、個々に十分対応するには至らない。 ⑦個々の生徒に応じた課題の設定や補習等を実施する。 ⑧少人数授業により生徒の実情に応じた授業をするが、個別になりすぎると補習などの対応が大変な部分もある。 ⑨小中学校の学び直し科目の設置を検討する。		
	特色ある教育課程の編成	27 多様なニーズに対応した教育課程	3.0	27 ①各時限に多様な授業が展開され、生徒が選択し授業を受けることができていた。 ②ノーマライゼーション、対人援助など特色ある教育課程の編成に努めている。 ③各教科で進路をふまえた講座が開設された。 ④就職希望者へ就職試験に対応する数学科目が新設された。 28 ①各担任の努力により丁寧な受講登録の指導ができた。 ②受講登録は非常に生徒によりそっていると思う ③受講登録の際には、複数の教員で生徒の学習計画を見直し、きめ細かな指導を行った。 ④受講登録事前面談時に、進路希望を確認しながら実施できている。 ⑤将来の進路を見据えた受講登録指導をすることができた。 ⑥教務部の先生方のガイダンスにより、受講登録をスムーズに実施されている。 ⑦受講登録時に担任と面談し、個々に応じた授業選択ができていた。 ⑧受講登録前、個別の面談において学習計画について指導ができた。	27 ①開校2年目のため、教員の数も限られており、生徒の幅広い学習ニーズに対応することができていない。 ②キャリア教育の視点に立った教育課程を検討する。 ③幅広いニーズに応じたカリキュラムについては、一定の評価は出来るが、個々の学力に応じた科目選択が難しい。 ④開校後まもなくでもあり、開講講座が限られている。 ⑤国語、数学、英語、理科、社会以外の実技をとまう多様な科目を開設できればよい。学力が低い生徒が主人公になれるような科目があればよいのだが。 ⑥さらに魅力ある学校設定科目の開講。 ⑦生徒のニーズがわからない。こういう勉強がしたいという意思をはっきり持っている生徒は少ないのでは。	27 ①キャリア教育に結びついた講座の設置 ②教育課程委員会等を通じて、できる限り幅広い教育課程の編成に努める。 ③生徒の興味、関心や進路に対応する科目の開講を検討する。 ④やむを得ないところがあると思うが、取りたい科目がとれる体制作りをおこなう 28 ①生徒の学習状況等に応じながら、保護者との面談も行う。 ②1年次当初に、生徒及び保護者にわかりやすく伝える。 ③ガイダンスだけでなく教務的なLHRの実施(シラバスの有効活用) ④進路希望に応じたクラスわけや各教科による補習授業の実施など。	
	計画的な学習の指導	28 生徒の学習状況等に応じた受講ガイダンスを行い、計画的な学習等についての指導を行う。	3.2	28 ①各授業の受講者にバラつきがあり、希望通りの授業を受けられない生徒がいる。 ②登録科目の決定が消去法的になりつつある ③各教科・科目の特色が生徒に十分に理解されていない。	28 ①各授業の受講者にバラつきがあり、希望通りの授業を受けられない生徒がいる。 ②登録科目の決定が消去法的になりつつある ③各教科・科目の特色が生徒に十分に理解されていない。		

評価点:十分に達成できた=4、概ね達成できた=3、あまり達成できなかった=2、達成できなかった=1

平成26年1月

領域	評価の観点	評価項目	実践目標	評価点	成果	課題	改善策			
教育課程(続き)	総合的な学習の時間	32	学校の特色等を踏まえた学習テーマを設定し、計画的に取り組む。	3.2	29 ①進路に関する授業が多く設定されており、本校の生徒が必要とする学習テーマに計画的に取り組んでいる。 ②生活体験発表、進路講演会等を計画的に実施できている。 ③総合的な学習の時間を活用し、計画的に進路学習を実施した。2年目となり、年次ごとのテーマもはっきりしてきており、また生活体験発表への取組も計画的に行われた。 ④年間テーマに沿って計画的に取り組みがなされた。位置づけの問題としては、教科「総合的な学習の時間」と進路LHRとの違いなど、表現上の工夫は必要かも。 ⑤インターンシップ(就業体験事業)の実施によって、体験学習活動の拡充や職業観の育成など、キャリア教育の取り組みが促進された。 ⑥非常に計画的な学習を推し進められていると思う。 ⑦「自己表現能力の向上」をテーマに1年次、2年次それぞれに応じた授業計画を立案することができた。	29 ①今年度設定したテーマと内容を踏まえた各総合的な学習の時間の年間計画及び具体的な授業内容の検討・立案。 ②複数年次が一斉に活動できる場所が限られている。 ③マンネリ化を避けるために毎年あたらしいことを取り入れたい。 ④3年次、4年次の具体的な計画の立案が不十分である。 ⑤インターンシップ関連(1)職種幅を広げた事業所を開拓する(美容関係や製造職等)。(2)実施時期の再検討(夏季休暇中等)(3)巡見における出張体制のあり方の検討	29 ①学校の特色等を踏まえ、学習テーマの設定や行事等への取り組み方を工夫する必要がある。 ②今年度実施した進路指導研修会やキャリア教育研修会が出たさまざまな提言を生かした授業計画を作成し、可能な限り年度当初に全教職員に提示して意見を吸い上げ、授業計画及び内容の充実・錬成を図る。 ③卒業年次に向けた進路計画の立案			
			生活体験発表会等を活用し、生徒の体験等に基づいた取組を推進する。		30 ①生活体験発表会では、生徒の知らない部分を発見することができた。 ②全体での生活体験発表ができ、発表した生徒がより生き生きと学校生活を送ることができている。 ③生活体験発表会やプレゼンテーションの実施により創意工夫を生かした総合的な学習の時間に取り組んでいる。 ④生活体験発表会の原稿作りを全員に科したのは自分を見つめる上で有効だった。 ⑤生活体験発表会は昨年度以上に充実したものとなった。上位大会で発表する者もいた。 ⑥生活体験発表会では、生徒数も増え充実してきており、生徒も熱心に取り組んでいた。 ⑦生活体験発表会に向けて、計画的に学習できた。			30 ①生活体験発表の原稿作りは、相当の学力差があり、丁寧な指導をする上で、時間配分が課題。 ②一部生徒がなかなか真剣に取り組めない。 ③生活体験発表は生徒全員を対象にしているが、欠席が多い生徒は原稿の作成や発表ができなかった。 ④取り組み困難な生徒への対応(指導)が難しいと思われる。 ⑤自己の体験を文章化する能力に劣る生徒は生活体験発表会への取り組みが不十分になる(ほとんど何もできない生徒も多い)。 ⑥積極的に取り組める生徒と、そうでない生徒の違いの大きさ。	30 ①なかなか自己表現ができない生徒に対しては、別の課題を与えるなどしてはどうか。 ②発表ができていない生徒への粘り強い働きかけとともに、補習等を行う。 ③生活体験発表の内容を冊子にしてまとめておくのもよいことだと思う。 ④単純に「文章を書く」ことに慣れさせるところから指導する。 ⑤多人数の教職員での対応。 ⑥原稿作りのマニュアル等、全職員が共通に指導できるマニュアルの作成。	
		31	総合的な学習の時間に係る計画等について、委員会等を通じ、教職員の共通理解を図る。	3.6	31 ①総合的な学習の時間に係る委員会を毎週行い、学習内容や指導方法の共通理解を図っている。 ②総合的な学習の時間に係る委員会がほぼ毎週行われ、教職員の共通理解を図ることができている。 ③キャリア教育研修会を実施し、来年度の総合的な学習の時間のテーマや内容及びその実践方法について共通理解を図ることができた。 ④毎週の打合せが有効に機能している。学校一丸となって工夫している。 ⑤授業の前に毎回、総合的な学習の会議が開かれている。 ⑥年間計画と事前の打ち合わせにより教職員の共通理解が図られている。 ⑦①総合的な学習の時間、②進路指導、③教科指導の3本柱による体系的なキャリア教育推進に向けて、キャリア教育委員会や研修会を実施した結果、教職員の共通理解や共同体の確立が促進された。 他 ①ノーマライゼーションの科目は外部講師も多く、本校の特色をふまえた良い科目になっている。	31 ①総合的な学習の時間の委員会について、授業担当により出席できない教員もいる。 ②時間割の関係で参加できない教職員もいる。 他 ①前籍校で「総合的な学習の時間」が1年生でなかった生徒への対応。	31 ①総合的な学習の時間の委員会について、隔週で時間帯を変えるなどの工夫が必要ではないか。 ②キャリア教育推進委員会との連携強化 ③週や月単位で会議日程を変えるなどして、どの担当者も会議に参加できるように考慮する。 他 ①「総合的な学習の時間②」の開講。			
交流及び共同学習	両校の共同体制の構築	32	交流及び共同学習に係る委員会等を実施し、両校教職員の共通理解を図る。	3.4	32 ①学習形態や内容等の研究を進めながら、その拡充を図っている。 ②共同学習の授業に直接関わらない職員であっても、学校行事や部活動、パンの販売など特別支援の生徒と関わる機会が多くあり、本校に在職していると言うだけで、本校の設立趣旨が身についていく職場環境になっている。 ③交流及び共同学習委員会によって、両校教職員の共通理解が得られている。 ④共同の学びを通して、教員の生徒理解等資質の向上につながった。 ⑤できるところはなるべく共同でやろうとする体制ができている ⑥交流及び共同学習委員会が定期的に開かれ、両校共同の学習や学校行事も充実している。	32 ①両校において配慮の要する生徒情報の交換が少し乏しいような気がする。 ②生徒はもとより、教職員の交流の促進。 ③共同の学びの授業に関する打ち合わせや反省会が委員会以外で設定されていない。 ④共同の学びの実践状況が共有化されていない。 ⑤両校職員間での交流の場があまりない。	32 ①制約もあり難しいがもっと多くの先生がたに交流および共同学習の参加(せめて授業見学だけでも)を促す機会があつてほしい。 ②担当者以外の職員にも成果が共有されるように工夫する。 ③職員間の交流できる機会を増やす。			
			両校生徒が共に学ぶ教科・科目や学習形態等について、研究等を進めながら、その拡充を図る。		3.1			33 ①授業、部活動、行事において交流ができている。 ②学校生活全般を通じて、相互理解を深めることができている。 ③共同の学びでは、お互いの交流が進んだことで、新たな一面を見ることができた。共同の学びの授業において生徒は多くのよい刺激を受けている。 ④交流及び共同学習では、各講座において様々な工夫がなされていた。同じ場を共有し、お互いの存在を自然なものとして受け入れられる状態になっている。	33 ①芸術科目など、年度当初から共同の学びの補助教員が配置されたことで、落ち着いた学ぶ環境が整った科目がある一方、大変な状況のまま授業を強いられるケースもあった。 ②両校生徒の共感性の高い教材を精選する。 ③授業の人数、カリキュラムに不都合が発生した。	33 ①共同の学びの実践報告と生徒へのアンケート調査を行い、検証を行う。
			校内で実施する行事だけでなく、遠足等、校外で実施する行事についても、両校共同で行うよう取組を推進する。		2.9			34 ①芸術鑑賞会は、両校のよい面が出た素晴らしい会となった。 ②文化祭や芸術鑑賞会等の行事で、両校一体となって運営をすることができた。 ③体育祭、文化祭、生活体験発表会、芸術鑑賞会、ノーマライゼーション発表会等の数多くの学校行事を両校で実施できている。 ④さまざまな行事において両校で実施することができている。大会などで混成チームで出場することができた。 ⑤体育祭、文化祭など多くの学校行事を両校で実施できている。	34 ①校外で実施する行事については両校別で実施しているものもある。 ②行事によっては、両校同時は難しいものもあり。 ③共同の遠足などはできないか。1部と特別支援の1年生、2部と同2年生、といった組み合わせで実施するとか。 ④生徒数の増加に伴い、校内外で両校の全生徒が共同で行事を実施することはより難しくなっている。今後は年次ごとや部ごとに交流できる機会を検討していてもよいのではないかと。 ⑤本年度も両校合同の遠足が実施できなかった。高校の授業に落ち着きがない状態で、特別支援の生徒が安心して学ぶ環境になっていない場合、困難が多く伴う。	34 ②特別支援の授業へ希望者が行くタイプCや伊丹西高校の授業へ希望者が行くタイプDの実施。
			両校生徒による部活動の実施		3.4			35 ①両校の生徒が行事や部活動を通じて交流する場面が多くなった。 ②様々なクラブ活動で両校の生徒が交流を深めた。また、公式戦でも両校生徒が「阪神昆陽」として試合に出場した。 ③生徒数も増え、両校生徒の関係も良く交流できている。部活動も増え活発になってきている。 ④部活動や食堂利用を通して、両校の交流を図ることができている。 ⑤各部活動において、両校生徒が積極的に交流して活動ができた。	35 ①実施場所、経費の面で問題等が発生している。大会によっては、一方が出れないなどの不公平感が生徒にあったので改善していきたい。 ②クラブによって、交流が十分である部とそうでない部がある。	34 ①校外で実施する行事についてもできる限り両校共同で実施できないか今後検討していく。 ②遠足実施時期、場所等を学校行事検討委員会でも早期に検討する。英語、数学などの授業にも、必要に応じて補助教員を配置する。 ③遠足の場合、高校側の人数を調整して、共同で行う。
ノーマライゼーション教育	創意工夫を生かした取組	36	学校の特色等を踏まえ、学校設定教科・科目において、関係機関等と連携した取組を推進する。	3.7	36 ①ノーマライゼーションや対人援助等の学校設定科目において、伊丹市社会福祉協議会等との連携を通じ、魅力ある授業を展開している。 ②教科「ノーマライゼーション」は、1年目を踏襲して2年目はさらに充実し、精選された内容となった。 ③授業の前に毎回、ノーマライゼーションの会議が開かれている。様々な講師の方に来ていただき、素晴らしい取り組みである。 ④教科「対人援助」において知的障害移動支援従事者研修講座を設定することができた。 ⑤ノーマライゼーションは2年目となり、内容もずいぶん精選され、多くの生徒が集中して授業に取り組んでいる。 ⑥組織的運営に向けて努力が続けられている。 ⑦多くの特別非常勤講師を招き、講義、実習を展開した。阪神昆陽の特色として定着してきている。 ⑧他校にはない、貴重な体験ができています。 ⑨生徒が楽しく熱心に取り組んでいた。	36 ①ノーマライゼーションを、生徒が理解できるようになるまでには、時間を要する。 ②教科「対人援助」において受講希望者が多いが希望者全員が受講することができない。 ③教科として対人援助や地域社会への支援とのつながりをどう考えるか、地域貢献へどのように発展させていくかが課題である。 ④ノーマライゼーションの授業の中身をさらに充実させていくことができればよい。 ⑤「対人援助」やH26開講予定の「地域社会への支援」の推進。	36 ①ノーマライゼーションについて、担当していない教員が具体的な実施内容を知らない場合がある。 ②講義、実習場所の確保、調整が難しい。担当者へかかる負担が大きい。 ③一部集中できない生徒あり。 ④キャリア教育とノーマライゼーション教育の連携を探る。			
			座学にとどまらず、手話の学習等、体験的な学習の実施を推進する。		3.7			37 ①車イス体験など多くの実習を取り入れ、効果的にノーマライゼーション教育を行うことができています。 ②2月には日頃の学習の成果を発表するノーマライゼーション発表大会を行う。 ③点字器具を用いた授業や講師をお呼びしての学習が展開された。 ④車椅子や手話の学習をとおして、体験学習ができています。 ⑤体験型の授業を交え、生徒の印象に残るノーマライゼーション教育を行えている。	37 ①外部講師の方に対して無礼な振る舞いをする生徒が少なからずいた。 ②集中できていない生徒への対応。 ③上位科目である対人援助の受講者数が少数であった。	
	教職員の共同体制の確立	38	38 ①ノーマライゼーションに係る委員会を毎週実施し、教職員の共通理解を深めている。 ②外部講師の利用など関係機関と連携した取り組みを推進している。 ③ノーマライゼーション教育の推進に係る取組等について、委員会等を通じ、教職員の共通理解を図っている。 ④充実した内容で、計画的に進められている。 ⑤各種ボランティア団体等から講師を招いていただき、生徒たちにとっては身近な体験ができる貴重な機会を設定していただけた。 ⑥後期はポツチャの体験や、車椅子の体験をすることができた。 ⑦ノーマライゼーションは本校の宝となる教育になっている。 ⑧授業の前に毎回、ノーマライゼーションの会議が開かれている。 ⑨ノーマライゼーション教育が定着してきた。 ⑩「ノーマライゼーション」を生徒全員が受講登録させることで、本校の特色の理解度が維持・向上している。	38 ①ノーマライゼーションについて、担当していない教員が具体的な実施内容を知らない場合がある。 ②講義、実習場所の確保、調整が難しい。担当者へかかる負担が大きい。 ③一部集中できない生徒あり。 ④キャリア教育とノーマライゼーション教育の連携を探る。 ⑤「ノーマライゼーション」から「対人援助」に移行する際の教員数、講座数が不足するなど機能が不十分である。 ⑥ノーマライゼーションの授業は各部あるが、次の対人援助については、学校全体の事を考え設置出来るようになってほしい。						